

## 『明六雑誌』『東洋学芸雑誌』の特徴語から見る明治前期書き言葉の語彙特性

著者	近藤 明日子
雑誌名	言語資源活用ワークショップ発表論文集
巻	3
ページ	213-220
発行年	2018
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00001655">http://doi.org/10.15084/00001655</a>

## 『明六雑誌』『東洋学芸雑誌』の特徴語から見る 明治前期書き言葉の語彙特性

近藤 明日子 (国立国語研究所コーパス開発センター) †

### The Characteristic of the Written Japanese Vocabulary in the Early Meiji era: An Analysis of the Specialized Vocabulary of "Meiroku Zasshi" and "Toyo Gakugei Zasshi"

KONDO Asuko (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

#### 要旨

明治前期の語彙の特性を明らかにすることを目的として、明治前期の書き言葉を代表する資料『明六雑誌』『東洋学芸雑誌』と明治中期以降の書き言葉を代表する資料『国民之友』『太陽』との語彙の頻度を比較し、『明六雑誌』『東洋学芸雑誌』に有意に高頻度な語(特徴語)を抽出し、その特性を考察した。その結果、①文語体・漢文訓読文由来の語、②一字漢語、③新しい事物・概念を表すための新語で後に別語に置き換わった語、④新しい事物・概念を表すための新語で後に事物・概念の衰退とともに衰退した語、⑤『明六雑誌』『東洋学芸雑誌』で特にとりあげられた話題と関連する語、という主に5種類の特性を有することが明らかになった。

#### 1. はじめに

日本語史において、明治・大正期は約60年という短期間に書き言葉が急激に変化した時期として特徴づけられる。開国による新しい事物・概念の流入による新漢語の発生等により語彙も大きく変化した。また、言文一致の進展に伴う文語体から口語体への文体の転換は語彙にも大きな変化をもたらした。

本研究では、明治・大正期の始まりにあたる明治0年代から10年代(以下、「明治前期」と呼ぶ)の書き言葉の語彙について、それ以降の時期の書き言葉の語彙と比較して、その特性を考察する。使用する資料は、明治前期の書き言葉の資料『明六雑誌』『東洋学芸雑誌』と、その比較対象とする明治20年代から大正期の書き言葉の資料『国民之友』『太陽』である。これらの資料はすべてコーパス化されており、その形態論情報を利用して、明治前期の資料の語彙の頻度とそれ以降の年代の資料の語彙の頻度を算出、計量的に比較し、明治前期の資料に有意に高頻度な語(特徴語)を抽出する。そしてその種類の考察を通じて、明治前期の語彙の特性を明らかにしていく。

#### 2. 分析方法

##### 2.1 使用する資料

本研究では明治前期の書き言葉を代表する資料として『明六雑誌』と『東洋学芸雑誌』を使用する。前者の『明六雑誌』は、明治6(1873)年に学術啓蒙を目的に結成された明六社の機関誌で、明治7(1874)～8(1875)年に1号から43号まで発行された。明六社社友16名によって書かれた、政治・経済・社会・教育・言語等の幅広いジャンルの155の

---

† kondo@ninjal.ac.jp

論説が掲載されている。明治 0 年代における書き言葉の代表性を相当程度担保した資料と見なし得る。『明六雑誌』は国立国語研究所 (2017) 『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』 (短単位データ 1.1) (以下、「明治・大正編 I 雑誌」と呼ぶ) に 1~43 号の全号が収録されており、本研究ではこのデータを使用する。後者の『東洋学芸雑誌』は、明治 14 (1881) 年から昭和 5 (1930) 年にかけて 567 冊刊行された学術総合雑誌である。自然科学の啓蒙を目的としながら、特に創刊当初は文芸等の他のジャンルの記事も掲載し、多くの読者を得た<sup>1</sup>。本研究では、創刊当初の 1~15 号 (初版、明治 14~15 年刊) に着目し、49 名の著者・訳者<sup>2</sup>による幅広いジャンルの計 130 記事<sup>3</sup>を掲載した、明治 10 年代における書き言葉の代表性を担保した資料と捉え、使用する。『東洋学芸雑誌』1~15 号 (以下、単に『東洋学芸雑誌』と呼ぶ) は現在、国立国語研究所でコーパス化が進められており<sup>4</sup>、その 2018 年 7 月時点でのデータを使用した<sup>5</sup>。このデータの仕様は「明治・大正編 I 雑誌」に準拠しており、『明六雑誌』のデータと『東洋学芸雑誌』のデータを併せて分析することが可能である<sup>6</sup>。

これらの資料から明治前期の書き言葉の語彙特性を明らかにするためには、比較対象となる資料が必要である。本研究では「明治・大正編 I 雑誌」に収録された『国民之友』明治 20 (1877)・21 (1878) 年刊行の 1~36 号および『太陽』明治 28 (1895)・明治 34 (1901)・明治 42 (1909)・大正 6 (1917)・大正 14 (1925) 年刊行の計 60 号分<sup>7</sup>のデータを使用する。「明治・大正編 I 雑誌」は「明治・大正時代の書き言葉を広く見渡し、年代ごとの変遷をたどれるように、各年代を代表する雑誌から一定の年数ごとの刊行分を収録し」<sup>8</sup>ているコーパスであり、その中の『国民之友』『太陽』のデータは、明治 20 年代から大正期 (以下、「明治中期以降」と呼ぶ) の書き言葉の代表性を担保した資料として使用することができる。

各コーパスのデータ<sup>9</sup>の中から、非文芸ジャンルのサンプル<sup>10</sup>を調査対象として選定し、その地の文を調査対象とした<sup>11</sup>。よって、本研究は論説・報道等の非文芸ジャンルの文章の

1 『改訂新版 世界大百科事典』「東洋学芸雑誌」項、  
<https://japanknowledge.com/psnl/display/?lid=102005214300>

2 翻訳記事の場合、原著者ではなく訳者を数えた。

3 漢文体の記事は除く。

4 将来的に「明治・大正編 I 雑誌」の一部として公開される予定である。

5 構築中のコーパスのため、以下の分析では公開版とは異なる値が算出される場合がある。

6 「明治・大正編 I 雑誌」のデータ仕様については間淵・近藤・服部 (2017) を参照のこと。

7 「明治・大正編 I 雑誌」に収録されている『太陽』巻号の詳細は  
[http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/chj/meiji\\_taisho.html](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html) を参照のこと。

8 [http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/chj/meiji\\_taisho.html](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html)

9 コーパスデータは国立国語研究所のデータベースに格納されたものを使用し、コーパスの言語量や各語の粗頻度を算出した。

10 サンプルとは、コーパス収録対象として選定されたひとまとまりのテキストの範囲を指す。本研究で使用するコーパスでは、雑誌に掲載された各記事を単位としてサンプルが定められており、サンプル=記事と捉えてほぼ支障はない。「明治・大正編 I 雑誌」では各サンプルにジャンル情報として「文芸」または「非文芸」の分類が付与されており、「非文芸」のサンプルを選定した。なお、コーパスには雑誌本体の構造要素をあらわすテキスト (誌名・欄名等) を収録するサンプル (サンプル ID が「000」で終わるもの) があるが、本研究ではこのサンプルは対象外とした。

11 サンプル中にある他文献からの引用部分や登場人物の発話部分は、サンプルの地の文とは位相を異にするため、調査対象外とした。また、漢文体や外国語で書かれた部分も調査対象外とした。

語彙について考察するものであり、小説・戯曲・詩歌等の文芸ジャンルの文章の語彙については言及しない。この非文芸ジャンルのサンプルの地の文の延べ語数・異なり語数を文語・口語の文体別に示したものが表 1 である。語数のカウントでは、コーパスの採用する「短単位」を 1 語とし、記号類・未知語は除いた。また、異なり語数は、コーパスの短単位の形態論情報のうち「語彙素・語彙素読み・語彙素細分類・語種・品詞」の 5 要素が一致するものを同語と見なし、カウントを行った。

表 1 調査対象資料の言語量

資料	文語		口語		全体	
	延べ語数	異なり語数	延べ語数	異なり語数	延べ語数	異なり語数
明治前期	334,605	19,875	8,164	1,652	342,769	20,215
明六雑誌	157,483	12,201	8,164	1,652	165,647	12,692
東洋学芸雑誌	177,122	13,038	0	0	177,122	13,038
明治中期以降	4,274,873	65,445	3,771,357	56,161	8,046,230	81,151
国民之友	846,992	29,207	6,893	1,075	853,885	29,295
太陽	3,427,881	59,753	3,764,464	56,114	7,192,345	76,761

### 2.3 特徴語の抽出

表 1 にあげた明治前期資料に出現する 20,215 語（異なり）について、明治中期以降の資料での出現頻度と比較して、有意に高頻度であることの程度（特徴度）を指数化し、特徴度の上位の語を明治前期の特徴語として抽出する。語の頻度の高低の程度を計る統計的指標は複数あるが<sup>12</sup>、本研究では対数尤度比（log-likelihood ratio）を使用する。対数尤度比による特徴語抽出は、英語学で一定の評価を得ており（石川 2008、p.99）、日本語史研究においても、古典作品の特徴語の抽出（宮島・近藤 2011）や古典作品内部の文体別特徴語の抽出（小木曾 2015）等に利用されている。対数尤度比やそれを補正した特徴度の算出方法は宮島・近藤（2011）に拠り、以下のように行った。

$$\text{対数尤度比} = 2(\text{alna} + \text{blnb} + \text{clnc} + \text{dln}d - (\text{a} + \text{b})\ln(\text{a} + \text{b}) - (\text{a} + \text{c})\ln(\text{a} + \text{c}) - (\text{b} + \text{d})\ln(\text{b} + \text{d}) - (\text{c} + \text{d})\ln(\text{c} + \text{d}) + (\text{a} + \text{b} + \text{c} + \text{d})\ln(\text{a} + \text{b} + \text{c} + \text{d}))^{13}$$

- a: 対象資料での語 W の度数
- b: 参照資料での語 W の度数
- c: 対象資料の延べ語数-a
- d: 参照資料の延べ語数-b

本研究では明治前期の資料（『明六雑誌』『東洋学芸雑誌』）が対象資料、明治中期以降の資料（『国民之友』『太陽』）が参照資料となる。語 W の対象資料での相対頻度が参照資料での相対頻度より低い場合、対数尤度比に-1 を乗じる補正を行い、その値を語 W の特徴度とする。特徴度は、語 W の対象資料での相対頻度と参照資料での相対頻度が等しい場合 0 となり、対象資料での相対頻度が参照資料での相対頻度より大きい場合は正の値、対象資料

<sup>12</sup> 内山・中條・山本他（2005）には、8 種の単独指標と単独指標を複数組み合わせさせた複合指標 1 種の計 9 種の指標があげられている。

<sup>13</sup> ln は自然対数を表す。a または b が 0 の場合、alna または blnb を 0 と見なし計算する。

での相対頻度が参照資料での相対頻度より小さい場合は負の値となる。正の値の場合、その値が大きければ大きいほど参照資料に比べ対象資料で高頻度に出現する程度が高く、負の値の場合、その値が小さければ小さいほど参照資料に比べ対象資料で低頻度に出現する程度が高いことを示す。

算出した特徴度の降順上位 100 語を表 2 (稿末) に示す。表中、語彙素読み・語彙素細分類は省略した語がある。また品詞は大分類のみを示した。この明治前期において特に特徴的な 100 語を考察し、この時期の語彙の特性を明らかにする。

### 3. 特徴語の類型から見る明治前期の語彙特性

表 2 にあげた明治前期の特徴語を検討した結果、以下の①～⑤の 5 種の類型におよそ分類できた。明治前期の特徴語は、明治中期以降との比較から抽出されたものであるから、「明治前期では使用されたが明治中期以降に衰退し使用されなくなった語」が主に含まれる。それに該当する類型が①～④である。他に、「語の衰退以外の要因で明治前期に高頻度になった語」も含まれており、それに該当する類型が⑤である。そして①～⑤にあてはまらない語を⑥として分類した。特に①～⑤の類型の性質が明治前期の語彙の特性を表すものとなる。以下、①～⑥の類型とそこに所属する語を詳しく見ていく。

#### ① 文語体・漢文訓読文由来の語

表 1 での文語・口語別の語数から分かるように、明治前期は文語体が主流で口語体がほとんど見られなかったものが、明治中期以降の特に『太陽』において文語体から口語体への転換が起き、明治中期以降では全体のおよそ半分が口語体なる。このことから、明治中期以降と比較して抽出された明治前期の特徴語のなかには、文語体に特徴的な語が多く見出し、これを第一に分類した。

典型的なものとして、文語助動詞「なり」「ず」「べし」「む」「非ず」「ごとし」、係助詞「や」、接続助詞「雖も」「ども」「に」がある。また、接続助詞「ば」のうち確定条件用法は口語体では使用されない文語体特有のものとしてあげられる。この他に、文語体の中でも漢文訓読体に特徴的な語句で使用される語が多く見られる。山田 (1935)・吉田他 (編) (2001)・松崎 (2006) に挙げられている漢文訓読に特徴的な語句で使用される語として、名詞「曰く」「故」「所」「所以」、代名詞「此れ」、動詞「然る」「持つ」(～ヲ以テ)「得る」(可能表現「～ヲ得」)「用いる」「欲する」、形容詞「如此し」、副詞「蓋し」「凡そ」「豈」「必ず」、接続詞「夫れ」「即ち」「而して」「且つ」、副助詞「のみ」があげられる。また、先にあげた助動詞・助詞のうち「べし」「非ず」「ごとし」「雖も」も漢文訓読に特徴的な語である。また名詞「方今」・代名詞「余」「小子」も漢文訓読由来の語と見なせると考えられる<sup>14</sup>。

松崎 (2006) では明治期の理科教科書を用いて、文語体の実用的文章での漢文訓読的性格を有する語の出現状況を調査し、刊行年の古いものにより顕著に出現することを明らかにしている。本研究から、雑誌の非文芸ジャンルの文章でも、刊行年の古い明治前期のものに漢文訓読由来の語が多く使用される傾向があることが明らかになった。

<sup>14</sup> この他、「者」「其の」「又」「皆」「至る」や格助詞「を」(～ヲ以テ、～ヲ得)も漢文訓読由来の語法により特徴語となったものと推測するが、なお検討したい。

## ② 一字漢語

次に分類するのは一字漢語である。「説」「理」「学」「害」「法」「書」「葉」「意」「論」「利」「言」「異」、また一字漢語サ変動詞「論ずる」「変ずる」「概する」があげられる。一字漢語については、田中（2013、pp.106-107、174-177）で明治中期から大正期、大正期から昭和期にかけてそれぞれ衰退する語の一類型として指摘されている。本研究から、明治前期から明治中期以降にかけても同様の傾向が見出されたことになる。これらの語のうち、「理」「学」「葉」（ページの意）「意」「利」「言」「異」「変ずる」「概する」は、現代語ではほとんど使用されず、別語に置き換わったと考えられる語であり、その衰退への道程が明治中期以降にはじまっていたことが示唆される。また、語義の一部が別語に置き換わった語としては、「法」（方法の意の場合）と「書」（書物の意の場合）がある。残る「説」「論」「論ずる」は現代語でも普通に使用され、別語への置き換えが想定できないものである。すべて論説に関わる語であることから、『明六雑誌』『東洋学芸雑誌』のサンプルのほとんどが論説文であるのに対し、『国民之友』『太陽』では報道文等の論説文以外のサンプルが増加するという雑誌の性格の差に由来して『明六雑誌』『東洋学芸雑誌』の特徴語になったもので、語の衰退とは直接関係しないものであるかもしれない。

## ③ 新しい事物・概念を表すための新語で、後に別語に置き換わった語

次に分類するのは、明治中期以降別語に置き換わり衰退した語である。②でとりあげた一字漢語の中にも同じ類型に属するものがあつたが、ここでは一字漢語以外の語をとりあげる。語種別にあげると和語「民」、漢語「人民」「理学」「駁者」「教門」「行星」「原質」「交易」「交際」「正金」、外来語「リバティー」がある。後に置き換わる別語として考えられるのは、「民」「人民」は「国民」、「理学」は「哲学」「自然科学」、「教門」は「宗教」、「行星」は「惑星」、「原質」は「要素」、「正金」は「正貨」、「リバティー」は「自由」である<sup>15</sup>。また、外国との商取引を指す場合の「交易」が「貿易」に、外国との付き合いを指す場合の「交際」が「外交」というように、語義の一部が別語に置き換わった場合も見られる。ここにとりあげた語の多くは新しく輸入された事物・概念を表す新漢語であり、明治前期までに使用がはじまりながら、明治中期以降には定着せず短期間で衰退した語ということになる。新漢語のめまぐるしい消長の一端を垣間見せるものと言えらる。なかでも「駁者」（反論する者の意）は『日本国語大辞典 第二版』にも掲載されておらず、『東洋学芸雑誌』の1サンプル（6号「東京経済雑誌に答」）のみに出現する一過性の最たる語である。また、「リバティー」（実際の出現形は「リバーチイ」「リベルチー」「リベルテイ」「リボルチー」と多様）はその概念そのものを解説するサンプルで使用されており、まだ概念自体が新しくそれを表す新語も定着していない時期には、原語のカタカナ表記語を使用する段階があつたことを象徴する語である。また、和語「民」は国民を表すために使用されたもので、ここから新しい概念を既存の和語で表したものの定着せず別の漢語（この場合「国民」等）に置き換わる場合もあつたことが分かる。

## ④ 新しい事物・概念を表すための新語で、後に事物・概念の衰退とともに衰退した語

次にとりあげるのは、指し示す事物・概念が衰退するとともにそれを表す語も衰退した

<sup>15</sup> 「諂諛」はこびへつらうことの意で、置き換えの別語は「追従」「媚び」等であろうか。なお考えたい。

と考えられるもので、「開化」「民選」「開明」があげられる。「開化」「開明」は明治前期の文明開化を表す語であり、「民選」は自由民権運動の出発点である明治7年の「民選議院設立建白書」をきっかけに明治前期重要な語となったが、それぞれ明治中期以降は別語に置き換わることもなく概念とともに語も衰退したものである。

#### ⑤ 『明六雑誌』『東洋学芸雑誌』で特にとりあげられた話題と関連する語

次に分類するのは、『明六雑誌』『東洋学芸雑誌』で特にとりあげられた話題と関連して使用された語で、語形や概念の衰退とは関係がないと考えられる語である。「化学」「紙幣」「化合」「水素」「ミル」「自由」「物」（「化合物」「有機物」等で使用）「原子」「三宝」「議院」「炭素」「泉」（「硫黄泉」「昇騰泉」等で使用）「肉桂」（「肉桂酸」「肉桂油」で使用）「有機」「酸素」「分子」「動脈」「堯舜」「権利」「同権」「SO」「ニトロ」があげられる。これらの多くは自然科学分野の用語であり、自然科学の啓蒙を目的とした『東洋学芸雑誌』の扱う話題の特徴を捉えた語群と言える。また「ミル」（『自由論』の著者）「自由」「三宝」（人生の幸福を追究するための三要件を「三つの宝」として言う語）「議院」「権利」「同権」は『明六雑誌』に主に出現し、『明六雑誌』の扱う主な話題を象徴する語群と言える。「紙幣」は『明六雑誌』『東洋学芸雑誌』でそれぞれ数号にわたる連載記事で主題となり、「堯舜」は『東洋学芸雑誌』の2サンプル（9号「堯舜は孔教の偶像なる所以を論ず」、13号「牧都宇氏に答ふ」。どちらも著者は井上圓了）で主題となり、そこで集中的に使用されたために特徴語となったものである。

#### ⑥ その他

最後にとりあげるのは、①～⑤には分類できなかったその他の語である。

「異（コト）」は形容動詞「異なり」や副詞「異に」の形で使用されるもので、それぞれ口語体では動詞「異なる」や副詞「殊に」という別語としてコーパス上は扱われるもので、コーパスの同語異語判別の規定に抛り特徴語となったものである。

「知る」「国」「人」「成す」は特徴語となった背景が不明な語で、今後の更なる考察が必要な語である。

### 4. おわりに

以上、明治前期の書き言葉の資料『明六雑誌』『東洋学芸雑誌』を、明治中期から大正期にかけての書き言葉の資料『国民之友』『太陽』と比較して、明治前期の特徴語を抽出した。そして、特徴語を主な5種の類型に分類し、各類型の性質こそが明治前期の語彙の特性を表すものとして考察した。このように、隣接する時期の語彙との比較から抽出した特徴語の考察は、当該資料に代表される時期の語彙の特性を捉えるのに有効な方法の一つと考えられる。なお、本研究で見出された明治前期の語彙特性は、明治前期と比較して明治中期以降に頻度が低くなった語に焦点をあてることで導き出されたもので、特性の一部を明らかにしたにすぎない。明治前期の語彙特性の全体像を把握するためには、今後、明治前期以前の時期の書き言葉を代表する資料との比較から抽出される特徴語の考察を行い、語彙特性の別の側面を補完していく必要がある。

## 謝 辞

本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」、MEXT 科研費 JP15H01883「日本語歴史コーパスの多層的拡張による精密化とその活用」による研究成果の一部である。

## 文 献

- 石川慎一郎 (2008) 『英語コーパスと言語教育』大修館書店.
- 内山将夫・中條清美・山本英子・井佐原均 (2004) 「英語教育のための分野特徴単語の選定尺度の比較」『自然言語処理』11:3, pp.165-197.
- 小木曾智信 (2015) 「中古和文における文体別の特徴語」『コーパスと日本語史研究』ひつじ書房, pp.93-117.
- 国立国語研究所 (2017) 『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』(短単位データ 1.1) [http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/chj/meiji\\_taisho.html](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html)
- 田中牧郎 (2013) 『近代書き言葉はこうしてできた』岩波書店.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 (編) (2000-2002) 『日本国語大辞典 第二版』小学館. ネットアドバンス社提供サービス「ジャパンナレッジ Personal」<https://japanknowledge.com/personal/> に拠る.
- 平凡社 (編) (2014) 『改訂新版 世界大百科事典 (第6版)』平凡社. ネットアドバンス社提供サービス「ジャパンナレッジ Personal」<https://japanknowledge.com/personal/> に拠る.
- 松崎安子 (2006) 「明治期の文語文の類型—小学校理科教書を対象として—」『文化』70:1-2, pp.92-105.
- 間淵洋子・近藤明日子・服部紀子 (2017) 「『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』(短単位 Ver.1.1) テキストの凡例と「中納言」表示項目について」  
[http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/chj/doc/abstract-meiji-taisho-201703.pdf](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/doc/abstract-meiji-taisho-201703.pdf)
- 宮島達夫・近藤明日子 (2011) 「古典作品の特徴語」『計量国語学』28:3, pp.94-105.
- 山田孝雄 (1935) 『漢文の訓讀によりて傳へられたる語法』宝文館出版. 復刻版 1979 に拠る.
- 吉田金彦・築島裕・石塚晴通・月本雅幸 (編) (2001) 『訓点語辞典』東京堂出版.



表2 『明六雑誌』『東洋学芸雑誌』の特徴語 100語

順位	語彙素 (語彙素読み) [語彙素細分類]	語種	品詞	明治 前期 粗頻度	明治中期 以降 粗頻度	特徴度	順位	語彙素 (語彙素読み) [語彙素細分類]	語種	品詞	明治 前期 粗頻度	明治中期 以降 粗頻度	特徴度
1	なり[断定]	和	助動詞	10,305	127,977	3308.5	51	如此し(カクノゴトシ)	和	形容詞	108	250	273.2
2	者(モノ)	和	名詞	2,078	13,359	2213.2	52	異(コト)	和	名詞	368	3,055	272.1
3	を	和	助詞	19,730	336,296	1824.5	53	人(ヒト)	和	名詞	963	12,465	268.8
4	此れ(コレ)	和	代名詞	4,619	53,896	1732.0	54	行星(コウセイ)	漢	名詞	43	1	265.5
5	ず	和	助動詞	6,655	95,266	1341.6	55	而して(シカシテ)	和	接続詞	732	8,672	262.0
6	然る(シカル)	和	動詞	1,490	11,271	1273.4	56	用いる(モチイル)	和	動詞	353	2,958	257.1
7	説(セツ)	漢	名詞	547	2,102	976.0	57	凡そ(オソソ)	和	副詞	224	1,374	252.0
8	曰く(イワク)	和	名詞	671	3,318	954.5	58	豈(アニ)	和	副詞	216	1,286	251.6
9	其の(ソノ)	和	連体詞	4,852	70,252	933.5	59	法(ホウ)	漢	名詞	303	2,335	251.5
10	べし	和	助動詞	3,185	42,055	839.9	60	書(ショ)	漢	名詞	189	1,006	249.2
11	理(リ)	漢	名詞	207	185	797.2	61	原質(ゲンシツ)	漢	名詞	50	19	240.1
12	人民(ジンミン)	漢	名詞	547	2,747	766.1	62	葉(ヨウ)	漢	名詞	68	79	238.5
13	持つ(モツ)	和	動詞	1,955	23,748	656.2	63	炭素(タンソ)	漢	名詞	81	141	238.5
14	理学(リガク)	漢	名詞	203	293	651.6	64	泉(セン)	漢	接尾辞	57	39	238.1
15	民(タミ)	和	名詞	232	461	638.7	65	相(アイ)	和	接頭辞	397	3,826	225.5
16	又(マタ)	和	副詞	1,090	10,683	599.9	66	肉桂(ニツキ)	漢	名詞	37	2	221.0
17	雖も(イエドモ)	和	助詞	694	5,331	579.2	67	有機(ユウキ)	漢	名詞	73	120	220.9
18	や	和	助詞	1,282	13,887	571.0	68	酸素(サンソ)	漢	名詞	62	70	219.8
19	開化(カイカ)	漢	名詞	154	169	552.0	69	分子(ブンシ)	漢	名詞	112	383	218.9
20	夫れ(ソレ)	和	接続詞	301	1,169	532.3	70	のみ	和	助詞	746	9,551	215.1
21	故(ユエ)	和	名詞	874	8,223	520.2	71	必ず(カナラズ)	和	副詞	372	3,574	212.6
22	論ずる(ロンズル)	混	動詞	372	1,872	519.8	72	意(イ)	漢	名詞	209	1,400	210.7
23	余(ヨ)	漢	代名詞	546	3,915	502.8	73	論(ロン)	漢	名詞	313	2,755	209.9
24	ども	和	助詞	823	7,656	500.2	74	動脈(ドウミヤク)	漢	名詞	52	41	208.4
25	む	和	助動詞	1,837	24,117	491.8	75	方今(ホウコン)	漢	名詞	90	246	205.6
26	蓋し(ケダシ)	和	副詞	411	2,444	479.6	76	堯舜(ギョウシュン)	固	名詞	48	30	205.5
27	即ち(スナワチ)	和	接続詞	943	9,743	465.7	77	変ずる(ヘンズル)	混	動詞	124	523	204.4
28	化学(カガク)	漢	名詞	209	624	450.3	78	権利(ケンリ)	漢	名詞	161	894	202.9
29	紙幣(シハイ)	漢	名詞	150	265	438.4	79	利(リ)	漢	名詞	139	682	199.1
30	化合(カゴウ)	漢	名詞	110	92	432.8	80	欲する(ホッスル)	和	動詞	299	2,651	198.0
31	学(ガク)	漢	名詞	142	264	404.6	81	非ず(アラズ)	和	助動詞	113	448	196.4
32	水素(スイソ)	漢	名詞	103	89	401.0	82	同権(ドウケン)	漢	名詞	41	16	195.9
33	皆(ミナ)	和	名詞	492	3,881	394.4	83	SO(エスオー)	記号	名詞	30	0	191.9
34	ば	和	助詞	2,802	43,821	388.9	84	交易(コウエキ)	漢	名詞	51	49	191.7
35	害(ガイ)	漢	名詞	170	466	387.7	85	国(クニ)	和	名詞	675	8,699	190.8
36	民選(ミンセン)	漢	名詞	89	64	366.5	86	所以(ユエン)	和	名詞	229	1,765	190.0
37	至る(イタル)	和	動詞	1,048	12,532	366.2	87	小子(ショウシ)	漢	代名詞	31	1	189.4
38	開明(カイメイ)	漢	名詞	88	65	359.6	88	学術(ガクジュツ)	漢	名詞	126	590	188.8
39	駁者(バクシャ)	漢	名詞	50	0	319.8	89	成す(ナス)	和	動詞	916	13,038	186.3
40	得る(エル)	和	動詞	1,334	18,267	311.2	90	ごとし	和	助動詞	1,659	27,135	184.5
41	ミル[Mill]	固	名詞	73	50	304.9	91	概する(ガイスル)	混	動詞	34	6	184.1
42	に	和	助詞	874	10,497	301.8	92	言(ゲン)	漢	名詞	180	1,196	183.4
43	自由(ジユウ)	漢	名詞	366	2,833	301.8	93	諂諛(テンユ)	漢	名詞	37	13	180.4
44	所(トコロ)	和	名詞	1,507	21,711	293.3	94	交際(コウサイ)	漢	名詞	107	441	180.0
45	物(ブツ)	漢	接尾辞	264	1,678	284.4	95	且つ(カツ)	和	接続詞	321	3,115	179.9
46	原子(ゲンシ)	漢	名詞	59	22	284.4	96	ニトロ[nitro]	外	名詞	31	3	178.2
47	三宝(サンボウ)	漢	名詞	53	11	281.1	97	正金(ショウキン)	漢	名詞	64	131	173.4
48	知る(シル)	和	動詞	726	8,402	275.9	98	異(イ)	漢	名詞	30	3	172.0
49	議院(ギイン)	漢	名詞	130	397	275.7	98	リバティー[liberty]	外	名詞	30	3	172.0
50	教門(キョウモン)	漢	名詞	43	0	275.0	100	理(コトワリ)	和	名詞	110	495	171.1